

＜長崎県民と長崎を訪れる人々の 心と命を守るためのサービス・ラーニング＞

研究年度 令和 5年度

研究期間 令和4年度～5年度

研究代表者名 橋本優花里

共同研究者名 岩重聡美、高 芳、芳賀普隆、坂元洋一郎

I はじめに

本研究は、サービス・ラーニングという近年、注目されている教育手法を用い、教育と地域貢献を同時に達成しようとするものである。サービス・ラーニングとは、「サービス（貢献活動）とラーニング（学習）をつなげ、ボランティア活動を学外で行い、その活動体験を通して学びを獲得することを目指す教育（村上、2007）¹」である。専門教育において獲得した専門的な知識・技能を、サービス・ラーニングを通じて社会貢献活動の中で実際に活用することで、現実社会で実際に活用できる知識・技能へと変化させることが可能になる。学生は社会貢献活動を通じて自らの社会的役割を意識するようになり、結果的として、市民として必要な資質・能力、すなわち社会人基礎力が高められていくことになる²。また、サービス・ラーニングの実施は、学生への教育効果や地域への貢献のみならず、大学と地域の連携を深め、地域における大学の位置づけを明確にし、地域に必要とされる大学としてのさらなる発展を後押しするものと考えられる。

筆者らは、2019年度から3年間、「分野を超えた教員の連携による長崎県立大学版サービス・ラーニングプログラムの確立—共生をテーマにした取り組み」をテーマにした学長裁量教育研究費による研究を行い、県や相浦地域の関係者と参加学生とともに、協働で様々な活動に取り組んできた。その結果、新たな課題として次の1.～3.の内容が掘り起こされた。1. 長崎県内に住む、あるいは訪れる外国人のための県内施設の外国語表記が十分ではないこと、2. 相浦地域に住む人々が地域の交通安全や一人暮らしの状況に不安を抱えていること、3. 度重なる大雨により、相浦川の氾濫が警戒されること、である。また、この数年間においてはコロナ禍という状況の中、外国人の受け入れ環境の整備を考える一方で、学生を海外に送り出すことについても大きな制約が生じていた。そのような中、学生を安全に海外に送り出すためには、我々が海外の方々を受け入れることと同様の環境整備が必要となることから、留学先での施設、特に健康や命に係わる病院等での日本語表記についても改めて確認する必要があるだろう。そこで、4つ目の課題として、4. コロナ禍での本学学生の留学先での安全確認体制が十分でないことも見えてきた。

本研究では、以上の4つの課題について「長崎県民と長崎を訪れる外国人の心と命を守るためのサービス・ラーニング」という一つのテーマにまとめ、3年の研究期間の間、それぞれの解決に取り組むことを目的とした。具体的には、1. については、病院を中心とした県内施設の外国語表記を充実させる

¹ 村上むつ子（2007）. 地域貢献活動を学習に“サービスラーニング”の試み 教育学術新聞第2259号 (https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2259/3_3.html)

² 筑波大学人間学群 http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html

ための活動を、2. については、相浦地域の安全安心を促進するための活動を、3. については相浦地域の防災対策を促進するための活動を、4. については留学先の安全を確保するための活動を行うこととした。1年目の昨年度は、参加した学生メンバーの問題意識やコロナの感染状況に伴う渡航制限を踏まえ、1. と 3. の活動に取り組んだ。1. については、当初、病院を中心とした県内施設の外国語表記を充実させるための活動を目指していたが、外国からの来訪者の困りごとに関するヒアリングに基づき、母語によらず誰でも緊急時に意思表示ができるツールの開発を目指した。また、3. については、実践経済学科の3年生専門演習の芳賀ゼミ内において、地域プロジェクト活動として「災害から命を守るために「備え」をしよう！」と「相浦川の実態とこれから」の2つの取組を行ったほか、公共政策学科の公共政策実習の担当者からの声掛けでサービス・ラーニングに興味を持った学生2名による「大学生の防災意識向上を目指して」と題した活動を実施した。

2年目となる今年度は、1. については、昨年度開発を目指したリストバンドを成果物として完成させた。2および3については、今年度から始まった学長プロジェクト「学生と教職員の共創による安心安全な大学づくり」との協働により防犯講座を実施した。3. については、学長プロジェクト「学生と教職員の共創による安心安全な大学づくり」と今年度から立ち上がった学内災害対策チームとの協働、ならびに公共政策学科の学生2名とともに、防災キャンプ、防災パンフレットの作成、防災訓練のアナウンスと実施の4つの活動を行った。また、同じく3. として実践経済学科の3年生専門演習の芳賀ゼミ内において、「地域防災活動を用いた環境教育貢献」と「郷土玩具を用いた地域発展について」とする2つの取り組みを行った。4. については、経営学科の留学生による「中国に短期留学する学生へのアドバイス」とした研修会を実施したほか、中国語学研修に参加した学生による後輩へのアドバイスを取りまとめた。

II. 活動内容

1. 緊急時の意思疎通を図るためのツールの開発（担当：岩重）

本学では、「サービス・ラーニング」の手法を用いた教育に重点を置いている。サービス・ラーニングとは、サービス（貢献活動）とラーニング（学習）をつなげ、ボランティア活動を行い、その活動体験を通して学びを獲得する教育のことである。³

学生たちは、1年時に「長崎のしまに学ぶ」やその他の体験学習の機会がある。その際には、このサービス・ラーニングの教育手法を取り入れ、学生が主体的に学び、学んだことを主体的に実践に活かすことに力を入れている。

経営学部国際経営学科 岩重ゼミでは、2021年度の「外国語表記プロジェクト」に続き、2022年度に「外国人の方の命を守るプロジェクト」に取り組んだ。それは、学生が学んだ英語力を活用しその英語力を実践に活かす場として、このプロジェクト（以下PJ）に着手、長崎県に暮らす、あるいは訪れる外国人の方々の不安や心配を少しでも軽減しようとして発案されたものがリストバンドである。

本PJの目的は、まず、外国人が長崎県で生活・観光する中で日常生活や緊急時の不安をなくす仕組みを作ること、そして次に、けがや病気をしたとき、安心して病院に行く・病院で自分の症状を伝えることができる助けとなるような提言を行うことである。さらに、目指す目標は、けがや病気にかかった

³ <https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/remsai/education/2258-3-4.html> 村上,2007

際あるいは緊急時に言葉が通じなくても意思疎通ができるもの・手段として、リストバンドを提案し作成することとした。

PJを進めるにあたり、本学に在学する留学生や外国人に対応する県内旅行会社や病院へのヒアリングなどを通じて外国人の不安や心配、それらに対する旅行会社の対応そして受け入れ側の病院での現状を詳細に調査した。

ヒアリングの結果を受け、その内容を分析、そして課題として考えられる項目についての解決策の検討を行いその結果として非言語意思疎通ツールをも含む1つとしてのリストバンドの作成を考えた。

本学留学生（中国・ベトナム人）へのヒアリングでは、幸いに病気にかかり不安になったことはなく、生活上の不安や心配もないとのヒアリング結果であった。

旅行会社へのヒアリングでは、外国人観光客が病気にかかった際の訴えや対処方法、病院が受け入れてくれるかどうか、そして外国人観光客がもつ受診時の不安などが明らかになった。具体的には、外国人観光客の受け入れ不可、医療通訳者の圧倒的不足、外国人観光客自身による日本の病院への理解不足などが挙げられている。

病院へのヒアリング結果からは以下の内容がわかった。まず、外国人観光客が保険に加入しているかどうか、身元の確認が重要であること、そして、医療通訳者の有無、宗教上の治療の問題、日本には存在しない薬を求めてくる、さらには、外国人観光客は問診票を読めず、医療行為の同意書作成に手間取るなどである。その一方、多言語化問診票を作成している病院も見受けられた。

以上のような現状を鑑み、学生たちは、外国人観光客が病気になった際などにほしい情報をまとめた材料をQRコードで作成、非言語意思疎通ツールとしてのリストバンド作成を提案した。このリストバンドにはピクトグラムなどを用いるとともに先のQRコードを掲載することを考え、そのリストバンドの作成と同時に、この情報を多くの方々へ発信しリストバンドの存在とその活用方法について知っていただけるように、インスタグラムアカウントも作成した。

今回リストバンド作成にあたり、以下の2点に留意した。まず1点目は、ローコストであること。そして2点目はローテクである。その理由は、このリストバンドが常に情報のブラッシュアップを図り、それらが簡単にそしてローコストで運営できれば、このリストバンドの活用が安定的に継続されると考えたためである。

実際に作成したリストバンドには、QRコードを掲載。そのコードをスマートフォンで読み込むと「To save lives」から始まり、それに含まれる情報は、6種類ある。1. 警察官や交番など警察を必要としている。2. 救急車を呼びたい。3. 病院へ行きたい。病院を探している。4. トイレを探している。5. Wi-Fiに接続し、インターネットをつなげたい。6. 何か飲み物が欲しい。そしてさらには「Emergency Contact」として、救急車を呼ぶ時の電話番号、警察を呼ぶ時の電話番号、海での緊急時の電話番号も掲載した（図1）。

リストバンドの材料は、紙にプラスチック素材を混ぜたものを使用した。この素材は、水をはじくため、このバンドをはめたままプールや海、温泉などに入っても全く問題がなくさらには、通常の人の方で引きちぎることや破くことはほぼできず、作成費用も非常に安価となっている。

リストバンド作成当初は、外国人観光客が病気にかかった時の対応に重点を置いていたが、PJが進むにつれ、病気にかかった際だけではなく、生活に対する緊急時の対応情報も追加した。

今回作成したリストバンドは、ピクトグラムを活用、英語表記のみにとどまった。長崎県を訪れる外

国人の増加に伴い、英語だけではなく多言語化への対応も急ぐ必要があると考えている。このリストバンドは、長崎県内の長崎県庁はじめ長崎市役所、旅行会社や病院など本PJへご協力いただいた各所へお届けし、外国人観光客に配布していただく予定である。

本県長崎県は、古くより海外との交流が深く街中にもその歴史を感じる場所が多く存在する。そしていつの時も多くの外国人観光客でにぎわっている。長崎県を訪れてくださる外国人の方々へ訪問先での不安や心配をできるだけ少なくし、長崎滞在を充分に楽しみ有意義な時間を過ごしていただけるように、長崎県おもてなしの1つとしてこのリストバンドを活用していただけたら幸いである。



図1 作成したリストバンド

2. 相浦地域の安全安心を促進するための活動（担当：坂元）

①活動実績

相浦警察署から生活安全課長をはじめ4名の警察官に来ていただき、表1の通り講座を開催した。内容は、防犯に関する講話（大学編、外出編、自転車編）とワンポイント護身術であった。

表1 相浦地域の安全安心を促進するための活動

活動日	内容	参加者
3月14日	防犯ミニ講座	16

②その他

学生に案内するための防犯グッズとして、防犯ホイッスルと防犯ブザーを購入した。

3. 相浦地域の防災対策

(1) 学長PJ「学生と教職員の共創による安心安全な大学づくり」と学内災害対策チームとの協働による活動（担当：坂元）

近年、様々な場所で大きな災害が起きている。我々が住むここ長崎は、かつて大きな洪水に見舞われた経験を持つ。今後、気候変動の影響を受け、新たな自然災害の被害を受ける可能性は十分にある。そこで、長崎県立大学では、災害時、長崎に住んでいる皆さんが自助力を発揮したうえで、周囲の方々と共助ができる力を身に着けるために、7月に大学内に“災害対策チーム”を立ち上げた（図1チームの目的等、および図2組織図）。その後、月1回の会議を行い、計画を立てたり、様々なイベントを開催したりして、防災・減災の取り組みを推進してきた。なお、チームのメンバーは有志の教職員と学生である。

また、佐世保市が提供する洪水ハザードマップを基に、大学周辺地域のマップのみを抜粋した学生用のハザードマップを作成したほか、重大な災害と防災のミニ知識を記した防災カレンダー

を（参考資料1）。

2023年6月8日

災害対策チーム（仮称）について

1. 目的：

災害時における本学学生及び教職員の命を守るため、本学の防災・減災環境の整備を企画し、推進すること。

2. 組織体制：別添組織体制図

- ・チーム長の下に次の2つの班を置く（企画広報班、避難・備蓄班）。
- ・各班は、教員2名、職員2名、学生3～5名程度とする。

3. 活動内容：

- ・企画広報班・・・事業継続計画（BCP）策定、スケジュール策定、
防災キャンプ企画、避難訓練企画、地域連携、
学内外周知など
- ・避難・備蓄班・・・避難所設定、避難経路確認、避難所運営計画策定、
備蓄計画策定、保管場所設定、備蓄品調達・管理など

4. スケジュール

6月中 災害対策チーム（仮称）員募集

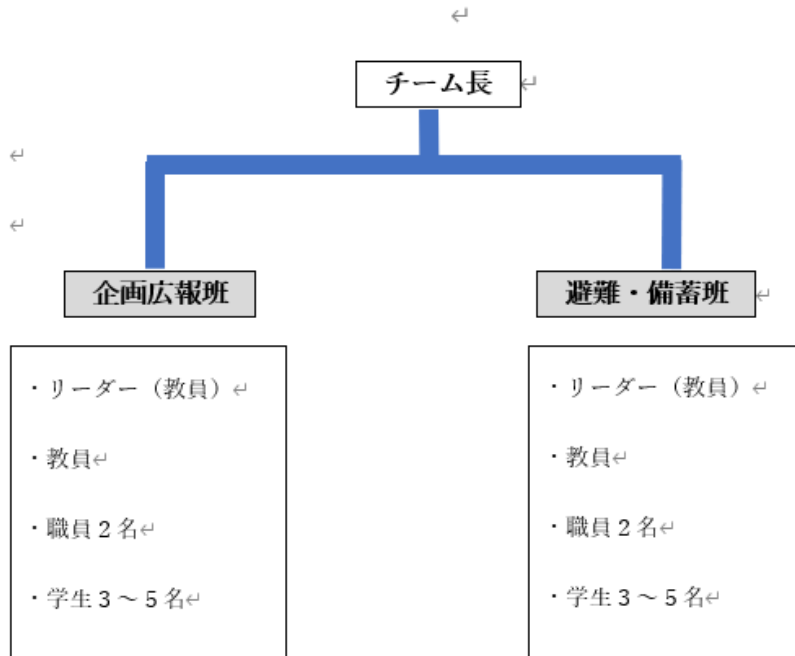
7月 立ち上げ

以降、月1回の打ち合わせを行う。

図2 災害対策チームの目的等

（組織体制図）

災害対策チーム（仮称）



（活動内容）

- ・事業継続計画（BCP）策定
- ・スケジュール策定
- ・防災キャンプ企画
- ・避難訓練企画
- ・地域連携
- ・学内外周知 など

（活動内容）

- ・避難所設定
- ・避難経路確認
- ・避難所運営計画策定
- ・備蓄計画策定
- ・保管場所設定
- ・備蓄品調達・管理 など

図3 災害対策チームの組織図

①活動実績

災害対策チームとの協働による活動実績は表2の通りである。

表2 相浦地域の防災対策

活動日	内容	参加者
2023年		
7月5日	学内災害対策チーム第1回会議	
5月24日	地域創造学部教養セミナーの防災講座	241
5月31日	経営学部教養セミナーの防災講座	147
6月28日	大学全体の防災講座	52
9月13日	学内災害対策チーム第2回会議	
9月27日	防災キャンプ	50
10月18日	学内災害対策チーム第3回会議	
11月29日	学内災害対策チーム第4回会議	
12月17日	消防訓練および炊き出し訓練	42
2024年		
2月28日	学内災害対策チーム第5回会議	
3月21日	学内災害対策チーム第6回会議	

②その他

水、非常食、カセットコンロなどを購入し、学内備蓄品とした。

(2) 芳賀ゼミによる地域プロジェクト活動（担当：芳賀）

①活動の趣旨及び実施の背景

地域プロジェクト活動は、2019年度 長崎県立大学地域創造学部実践経済学科 2年生 基礎演習・芳賀ゼミ（5名）のゼミ活動において、地域実践の観点から新たな試みとして開始された。地域プロジェクト活動とは、ゼミでの調べ学習及びフィールドワークを通して地域の環境問題など地域課題を発見するとともに、学生の視点で考え、調べ、まとめることで地域貢献につなげていく、学生提案型のゼミ活動のことである。長崎県立大学の周辺地区や相浦川周辺（大学周辺）について知ること、環境の視点（水環境改善など）から魅力的な地域にしたい、そして環境を学ぶゼミとして何か地域に貢献できることはないか、という問題意識から本プロジェクト活動を立ち上げた。

また、3年生の専門演習では、2023年度（今年度）が4年目の取り組みである。なお、本プロジェクト活動では、2019～2021年度（第I期）の3年間、学長裁量教育研究費におけるサービス・ラーニングプロジェクト「分野を超えた教員の連携による長崎県立大学版サービス・ラーニングプログラムの確立—共生をテーマにした取り組み」（代表：橋本優花里）と連携して取り組んできた。具体的には、「共生」という大きな枠組みのもと、「自然環境との共生に基

づく環境保全」というテーマで、

- ・大学近隣地域の自然環境の観点からみた課題の整理
- ・ごみのポイ捨て問題に関する調査
- ・自然・歴史・文化からみた相浦川と地域とのつながりに関する調査
- ・大学生の防災意識に焦点を当てた調査研究

といったトピックに焦点を当てて、調査・研究を行ってきた。

それに加え、2022年度から新たに立ち上がった学長裁量教育研究費におけるサービス・ラーニング第Ⅱ期プロジェクト「長崎県民と長崎を訪れる人々の心と命を守るためのサービス・ラーニング」（2022年～2024年度、代表：橋本優花里）に参画し、ゼミ活動と連携して取り組んだ。なお、基礎演習でも2023年度は5年目の地域プロジェクト活動の取り組みを行ったが、テーマやトピックの関係で、今回は主に、専門演習芳賀ゼミ3年生の活動を紹介する。

②2023年度 地域プロジェクト活動におけるテーマ設定

1) これまでの地域プロジェクト活動から継続している問題意識・視点

学長裁量教育研究費による第Ⅰ期のプロジェクトでは、長崎県や相浦地域の関係者、参加学生とともに、協働で様々な活動に取り組んできた。いくつかの課題が掘り起こされたが、自然環境との共生関連では、3) 度重なる大雨により、相浦川の氾濫が警戒されること、が抽出された。近年、様々な地域で見られる豪雨による災害も他人事ではない。佐世保校の近隣を流れる相浦川は、近年、氾濫こそないものの、毎年のように氾濫危険水位に達するような豪雨に見舞われている。大学周辺には日本人学生のみならず、多くの留学生や高齢者のような災害弱者が住んでいる。災害時には速やかに安全な場所に避難できるよう環境を整える必要もあるだろう。いずれの問題も、長崎県民や長崎を訪れる方々の心と命の安全性に関わる問題であり、サービス・ラーニングのテーマとしては大変重要な意義があるものと考え⁴

③2022年度に実施したイベント

また、今年度の地域プロジェクト活動の大きな特徴は、芳賀ゼミの活動を地域の人々に発信する手段として、環境イベントを開催したことである。今年度のイベント実施の伏線として、前年度のイベント実施があるので、その点に触れておきたい。

昨年度（2022年度）のイベント実施の背景としては、地方都市の人口減少が深刻な課題となっている中、輪読及びフィールドワークを通して、ゼミ生が考える相浦地区が抱える課題は、地域住民同士の交流の場（特に学生と高齢世代）が少ないことであると分かった。そこで、昨年度の地域プロジェクト活動の目標を、地域住民同士の交流の場を提供することに決定し、ゼミ生独自のイベントという手段を用いてアプローチを行った。芳賀ゼミ基礎演習ゼミ生9人で、世代間交流を目的とした地域住民向けイベント「みんなであそぼうむかしあそび」を相浦地区コミュニティセンターにて2023年2月18日（土）に実施した。イベントの内容において、「昔遊び」を選んだ理由は、①佐世保の伝統的工芸品、産物である佐世保独楽（させぼごま）を小中学生に知ってもらうことで、地域の伝統が失われるのを防ぐことである。また、②昔遊びにおいて詳しい世代というのが高齢者であることから、地域の高齢者と小中学生などの子供たち

⁴ 「令和4年度学長裁量教育研究費 研究計画書」p.1、およびp.2)

との世代間交流つを持てる空間の提供を行うことが、地域を盛り上げるための最適な方法ではないか、という結論に至った。当日、雨の中ではあったものの約100名の来場があり、県外からの参加者もいた。参加者からの意見としては、「普段触れる機会のない独楽に触れることができたので良い経験になった」「インスタグラムで知り、楽しそうだったので参加した」「今後も継続して開催して欲しい」などの意見が寄せられた。

④昨年度のイベント実施の課題と今年度の環境イベント実施の理由

一方、2022年度に実施したイベントでは、ゼミ生やボランティアの学生と子供たちとの交流や、子供連れの家族単位での参加が多かったのが、予想外の参加者属性であった。また、専門演習（3年生）芳賀ゼミゼミでは、SDGs（Sustainable Development Goals；持続可能な開発目標）や環境政策の視点で学んでいるが、フィールドワークや輪読、学生同士のディスカッションを通して、①郷土玩具に触れる機会の減少、②相浦地区における防災意識の低さ、といった2点の問題意識が浮かび上がってきた。

また、今年度はゼミ生が12人と昨年度より増えたことや、最近、毎年のように梅雨前線や台風に伴う豪雨被害が全国的に発生し、防災・減災への意識がゼミ生の中でも高まってきていることから、昨年度よりも目標を2つに増やし、文化振興と市民防災の普及という複数の目標を設定することとなった。それに伴い、調査は「木育班」（Aグループ）、「防災班」（Bグループ）と分けて進めた。そして、今年度も昨年度末と同様、体験型のイベント（遊ぼう！学ぼう！環境FESTA）という手段を用いて、2つの課題にアプローチし、地域住民に発信した

⑤環境イベント「遊ぼう！学ぼう！環境FESTA」の概要

開催日時は2023年11月25日（土）13:00～16:00で、会場は相浦地区コミュニティセンターで実施された。郷土玩具と防災では分野が大きく異なることから、会場を2つに分け、講座室1・2では佐世保独楽回し体験を行い、講座室4では防災サーキットを行った（図4）。

佐世保独楽回し体験のブースでは、佐世保独楽廻し体験、けん玉・お手玉、折り紙、調査報告資料の掲示・休憩スペースの提供を行った。一方、講座室4で行った防災サーキットとは、地域の災害事情に特化したイベントのことで、防災クイズの実施→災害史紹介など、調査報告資料の掲示→防災バッグの体験→マイタイムラインの作成、の4コーナーを1つのサーキット（ワンサイクル）として学ぶ仕掛けを施している。マイタイムラインの特徴としては、「インプット・アウトプットの両立」、「所要時間20分と短時間で学べる」、「地元愛の形成」、「地域住民と大学生との交流」がある。

このような背景や問題意識から、専門演習芳賀ゼミでは、今年度の地域プロジェクト活動のトピックを以下のように設定した。

- ・「郷土玩具を用いた地域発展について」（Aグループ（木育班））
- ・「地域特化型防災教育の提案—防災サーキットの事例を受けて—」（Bグループ（防災班））



図4 環境イベント「遊ぼう！学ぼう！環境FESTA」会場の様子
（出所）芳賀撮影。

なお、環境 FESTA 開催当日は、110 名が来場・参加し、様々な年代の方に楽しんでもらうことができた。子供たちとの交流と共に親世代の方々との会話によって、地域住民の本音を聞くことができた。

⑥2023年度 地域プロジェクト活動の経過

2023年度 芳賀ゼミの地域プロジェクト活動の経過は表3の通りである。

表3 芳賀ゼミ・地域プロジェクト活動の内容

年度	内容
2023年度	<p>【2023年度 専門演習3年生】</p> <p>(前期：Q1・Q2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相浦川など大学周辺のフィールドワーク ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談 ・外部講師による講義 ・7月～地域プロジェクト活動に向けて <p>→活動計画・調査計画の具体化、グループ分け、役割分担検討</p> <p>(夏休み)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木育班、防災班それぞれの調査・活動計画に沿って、学生主体でフィールドワークや聞き取り調査、文献・資料収集、グループごとの文献輪読の実施 <p>(後期：Q3・Q4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2チームに分かれてグループワーク実施 <p>→活動計画・調査計画の具体化、文献調査、フィールドワーク、アンケート調査の実施、調査結果の集計・集約</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境イベント実施に向けての準備、関係者へのご挨拶・協力要請 ・外部講師による講演 <p>◆2023年11月25日(土)：環境イベント「遊ぼう！学ぼう！環境 FESTA」(於：相浦地区コミュニティセンター)開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合同ゼミ報告会に向けての準備 <p>◆2023年12月14日(木)：芳賀ゼミ2年・3年合同の地域プロジェクト活動報告会で活動・調査内容の発表、意見交換</p> <p>◆2023年12月16日(土)：第12回 佐世保校合同ゼミ報告会にて活動・調査結果について発表</p> <p>◆2024年2月21日(水)「令和5年度 学長裁量教育研究費最終報告会」(於：長崎県立大学佐世保校 地域交流棟 405 教室)にて、専門演習 芳賀ゼミ Aグループ(木育班)及びBグループ(防災班)の学生が活動内容を発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2024年2月、「2022年度 長崎県立大学 地域プロジェク

	<p>ト活動報告書」〔第1版〕（暫定版発行）、修正作業</p> <p>◆2024年2月、「2022年度長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第2版〕発行</p> <p>・2022年2月中旬～年度末：地域プロジェクト活動における1年間の取りまとめ、「2022年度 地域プロジェクト活動報告書」作成に向けての作業実施～グループごとに調査レポート作成とこれまでの発表資料修正作業実施</p>
	<p>【2023年度 卒業論文4年生】（2022年度専門演習3年生）</p> <p>2023年2～4月</p> <p>・「2022年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」作成に向けて、A、B両グループにおける調査レポート作成と前年度の佐世保校合同ゼミ報告会資料修正作業実施（後期：Q3・Q4）</p> <p>◆2024年2月28日、「2022年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第2版〕発行</p>

（出所）筆者作成。

第1Q及び第2Qは、地域プロジェクト活動に関する共通認識、理解をゼミ内で共有した上で、関連資料の輪読やフィールドワークを行った。また、7月には、輪読報告と並行して、地域プロジェクト活動に向けてテーマを議論・確定させた上で活動計画・調査計画を具体化するとともに、グループ分けと役割分担の検討を行った。この議論をもとに、木育班、防災班それぞれの調査・活動計画に沿って、学生主体でフィールドワークや聞き取り調査、文献・資料収集とグループごとの文献輪読の実施を行った。

第3Qは、夏休み期間中のフィールドワークや聞き取り調査、資料収集、文献調査などを踏まえながら、環境イベントの具体化及び準備を行った。その後、相浦地区など、環境イベント実施に向けての準備、関係者へのご挨拶・協力要請を行った。その上で、11月25日（土）に環境イベント「遊ぼう！学ぼう！環境FESTA」を開催した。

1) 「郷土玩具を用いた地域発展について」（専門演習 芳賀ゼミ Aグループ（木育班）：6名で実施）

○調査・研究の目的

前年度である2022年度の基礎演習の地域プロジェクト活動で、佐世保の郷土玩具である佐世保独楽を活用した地域イベントを開催し、地域住民の交流の促進を図ることを目的とした活動を行った。佐世保の街で佐世保独楽は多くの人から親しまれているものであるためイベントには多くの人が集まった。しかし、反省点として佐世保独楽についての文献収集やヒアリング調査が疎かであり、私たちが地域住民の方々に説明するだけの情報を得ることができていないことが挙げられた。今回（2023年度）は2022年度の反省を活かして、フィールドワークのための準備期間を多く設けることで、より詳しい内容を地域住民の方に発信することを念頭に調査を行った。

今回の調査の目的は2つある。1つ目は佐世保独楽の歴史や文化をより深く理解し、地域振興や発展の手掛かりをつかむことである。2つ目は佐世保独楽の原料であるマテバシイについて研究し、佐世保独楽自体の今後の発展に貢献することである。

マテバシイとは佐世保独楽の材料となる木のことである。今回は2022年度の研究から継続した歴史や文化の研究に加え材料まで調べることにした。これは、ヒアリング調査で佐世保独楽本舗様に協力していただいた際に、材料についても調べてみるのはいかがでしょうかと提案をいただき、私たちとしてもマテバシイについて興味が湧いたからである。材料まで知ることによって佐世保独楽への理解をより深めることができ、有益な情報があれば佐世保独楽本舗様への情報提供を通して、さらなる佐世保独楽の発展に役立てていただきたいと考えている。

○調査内容

①川内峠での調査

長崎県平戸市にある川内峠にマテバシイ林があることが分かったため、2023年9月4日に調査に行った。

②「ふるさと自然の会」へのヒアリング調査

2023年9月19日（火）に「ふるさと自然の会」様に対し、マテバシイに関するヒアリング調査を行った。害虫被害をもたらすカシノナガキクイムシなどの、郷土資料や参考資料に載っていないような情報や、マテバシイの実を使った遊び方や食べ方などの、実際の体験を交えた貴重な情報を得ることができた。

③各種図書館への文献調査

2023年9月4日に長崎県平戸市にある「平戸市未来創造館」、同年10月18日に長崎県長崎市にある「長崎県立長崎図書館郷土資料センター」、長崎県大村市にある「未来 on 図書館」を訪れ、マテバシイや佐世保独楽の文献を調査した。

これらの調査を踏まえて、森林関係従事者を増やすために、「木育」の観点が重要なのではないかと考えた。木育とは、原体験として木材との関わりを深め、豊かなくらしづくり、社会作り、そして森づくりに貢献する市民の育成を目指す活動のことである。私たちが調べたマテバシイや佐世保独楽に関する情報を地域市民へ還元し、森林や森林環境に興味を持ってもらうことが私たちにできることであると考えた。木育を推進することで森林課題を解決したいという考えと、地域発展に貢献したい、この2つの観点から私たちはイベントを開催することが最適なのではないかと考えた。

大学前にあるあいあいプラザにて環境フェスタというイベントを行い、地域住民との交流を図るとともに、地域住民の方々との意見交換もできた。

2)「地域特化型防災教育の提案—防災サーキットの事例を受けて—」(専門演習 芳賀ゼミ Bグループ (防災班) 6名で実施)

○調査・研究の目的

防災班は、これまで芳賀ゼミ生6名で活動を行い、一般市民の防災力の向上を目標として、さまざまな活動を行ってきた。今年度の7月末から本格的に活動を始め、福岡市民防災センター様の視察や佐世保市防災危機管理局様、長崎地方気象台様へのヒアリング調査を実施し、行政機関や学外の有識者を中心にご協力いただいた。調査の実施日程、および内容は以下のとお

りである。

○調査内容

防災班は2023年9月7日（木）の福岡市民防災センターの視察や2023年9月28日（木）佐世保市防災危機管理局様に対する対面での調査、2023年10月18日（水）の長崎地方気象台様へのメールでの聞き取り査を実施し、行政機関や学外の有識者を中心にご協力いただいた。

○主な調査結果及びまとめ

ヒアリング調査では、佐世保・相浦地区においては防災意識の中でも、特に水害対策の意識を強く持つ必要があるのではないだろうか。自分の住む地域のリスクを理解した上で、適切な避難行動を行うことが不可欠であり、自分の身は自分で守るという考え方をすべきなのである。以上の調査を通して、防災に強いまちをつくるためには、地域に特化した防災教育が大切であることが明らかになってきた。

防災班では、自助の重要性に関して理解度を把握するため、長崎県立大学大学生に対して自助意識についてのアンケート調査を、Google フォームを利用して実施した。期間は2023年11月21日（火）から12月5日（火）の2週間行い、147件の回答を受け取った。

最初に、「自助・共助・公助について、あなたが重要度の高いと思う順に順位をつけてください」という質問をした。グラフが示している通り、147人中110人（約7割）の人が自助を一番重要であると考えていることが読み取ることができる。しかしながら、多くの人が自助が重要であると考えている中で、その自助について現時点で思いつく具体例を挙げてもらった。水、食糧、常備品の備蓄など防災バッグの準備、ハザードマップ、避難経路の確認、避難訓練への参加、家族との連絡手段の確保、天気予報の確認などが挙げられた。多くの意見が挙げられた一方で、防災バッグの中に何を詰めるのか、何日分の備蓄をするのか回答に具体性がなかったり、ハザードマップの確認や家族との連絡手段の確保などの打ち合わせや準備する機会の少なさが課題となった。

水害から身を守るためには「自助の意識」が必要だが、自助の内容に具体性が無いという課題が上がった。そこで、芳賀ゼミ防災班では自助の意識を向上させることを目的とした「防災サーキット」というイベントを独自に企画・実施した。我々が企画・実施した防災サーキットは、専門演習芳賀ゼミ主催のイベント「環境 FESTA」の一コンテンツとして実施された。実施日時は2023年11月25日（土）13時から16時（於：相浦地区コミュニティセンター）にて開催した。このような取り組みを、イベントを通して紹介し、地域住民の方々に参加してもらうことで、地域の住民の方と大学生の交流の場として機能することができる。以前から、相浦地域の方々から県立大学生と交流する機会が少ないという声をいただいていたため、これらの要望に応えることもできた。

3) 調査・研究成果の公表

主な調査・研究成果の公表としては、以下の通りである。

- ・2023年12月14日（木）：芳賀ゼミ2年・3年合同の地域プロジェクト活動報告会で活動・調査内容の発表、意見交換
- ・2023年12月16日（土）：第12回 佐世保校合同ゼミ報告会にて専門演習 芳賀ゼミ3年Aチーム及びBチームが地域プロジェクト活動内容及び調査・研究結果について発表（な

お、佐世保校合同ゼミ報告会において、芳賀ゼミ A チームが第 1 位、B チームが第 2 位を獲得した。）

- ・2023 年 2 月 21 日（水）「令和 5 年度 学長裁量教育研究費最終報告会」（於：長崎県立大学佐世保校 地域交流棟 405 教室）にて、専門演習 芳賀ゼミ A グループ及び B グループの学生（渡邊航平・折原悠太）が活動内容を発表
- ・2024 年 2 月 28 日、「2022 年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第 2 版〕発行（※なお、本稿の一部は、上記の地域プロジェクト活動報告書をもとに執筆している。）

4) 今後の課題

今年度の地域プロジェクト活動においては、今回、ゼミ独自で環境イベントを実施する試みを行うことで、芳賀ゼミの調査・研究成果を公表するとともに、地域住民の方々との交流を通して現状や問題意識、課題などを共有することができた。地域プロジェクト活動としても第 2 段階に入っている中で、チャレンジングな試みであった。

一方で、先行研究による仮説提示や、アンケート調査、および解析方法には課題を残している。また、イベント開催に際しては、学生自身の振り返りから、イベント周知の方法や多世代間交流、イベントの継続性などが課題点として指摘された。

さらに、ゼミ学生に対して、毎年、地域プロジェクト活動に関するアンケート調査を行っているが、2020～2022 年度のアンケート調査の自由記述をもとに解析した結果、個人の資質向上や経験（体験）からのコメントが多く、ファシリテーション力向上や企画運営力向上には課題もある。その一方で、昨年度末から今年度にかけて開催した複数回のイベント実施は、学生自身が企画・運営・事前準備を行う経験を経ることにより、そういった能力・資質を高めていくことも期待される⁵。それとともに、地域の諸課題を自分事と捉え、自ら地域に対して働きかける姿勢も身につくのではないかと、といったことを示唆するものであった。地域プロジェクト活動における実践の実績やデータを蓄積していくことで、地域の実情に根差した政策提言を可能にするとともに、提案内容の実現可能性、他地域の実践例や実情との比較分析や効果的な実践方法については今後の課題としたい。

(3) 大学生の防災意識向上を目指して（担当：橋本・岩重・芳賀・高）

公共政策学科に所属する学生 2 名 A と B が公共政策実習の一環として、サービス・ラーニングに取り組んだ。また、経営学科の留学生 C も A と B の取り組みに協力した。以下、公共政策実習の報告書として A と B が記した内容に基づき、一部改変したうえで活動の概要と成果を示す。

①サービス・ラーニングの意義

A と B が示した、サービス・ラーニングの意義は表 4 の通りである。表 4 の内容からは、学生はサービス・ラーニングの意義を十分に把握するとともに、自身に資する活動として理解していることがわかる。

⁵ 芳賀普隆「環境保全に関する大学生の学びにおける学生の意識に関する考察—「地域プロジェクト活動」の事例—」日本環境教育学会第 34 回年次大会（鳥取）2023 年 8 月 27 日（日）発表内容より。

表4 参加した学生が考えるサービス・ラーニングの意義

参加学生	内容
A	<p>サービス・ラーニングとは、学生が教育活動の一環として、地域コミュニティのニーズを踏まえた社会奉仕活動に取り組むことで、大学等で学んだ知識を、実際に地域のフィールドで実践的に体験することにより、新たな学びを得て、社会問題について考え、解決策を考える力を身につけたり、自身の進路、キャリアデザインについての視野を広げる目的がある。</p> <p>また、サービス・ラーニングを行うことによって、次のような効果が期待される。</p> <p>1つ目は、学生がコミュニティに奉仕することで、地域社会や世界に対して貢献する機会を提供する。学生は自身の力や能力を使って、他者のために役立つことを学ぶことができる。</p> <p>2つ目に、サービス・ラーニングは実践的な活動を通じて学ぶ機会を提供する。学生は現実の問題に直面し、実際の経験を通じて理解を深める。また、他の参加者や地域の専門家との連携を通じて、多様な視点から専門的な学びを得ることができる。</p> <p>3つ目に、サービス・ラーニングは社会的な課題や不平等などの現実の問題に取り組むことを通じて、学生の倫理的な意識を醸成する。学生は社会正義や共感、道徳的な判断力を発展させる機会を得る。</p>
B	<p>佐世保市役所相浦支所、相浦地区自治協議会への聞き取り調査や大学生を対象とした防災意識に関する調査を行った。その結果、公的機関が発信している防災情報が周知されていないことや、多くの学生が災害に対する備えを全くあるいは十分に行っていないことがわかった。またここから学生の防災への備えが不十分であることや、防災に対しての意識の低さがわかった。この調査から、地域が大学や学生に求めていることは、学生をはじめとする若い世代の防災意識の向上に向けた取り組みを必要としていることがわかる。今後様々な地域に居住し移転を繰り返すことが予想される学生などの若い世代にとって、その土地に応じた防災意識を身につけていくことが次世代の防災意識の向上にも必要になっていくと考えられる。学生だけではなく、若い世代に防災意識を強く持つってもらうためには公共の力が不可欠となる。</p> <p>今年度は「官学防災共創計画」、「災害自分化プロジェクト」、「防災ノートの作成」などの様々な若者の防災意識向上のためのプログラムを実施する予定であった。「官学防災共創計画」では学生が学生の声を市に伝え、防災情報発信体制を市と共に作っていく。この活動によってプロジェクトに参加する学生にとって自身や周囲の学生をはじめとする若者世代の防災意識に対しての問題点を明らかにすることができる。また市に学生自身の声を伝えることにより、市が若者の防災意識向上のために行える限界をすることができる。「災害自分化プロジェクト」では学内外で防災意識を育てる取り組みを行うことができる。この活動によって防災</p>

	<p>意識に対しての具体的な解決案を提案することが可能になる。「防災ノートの作成」では今まで行ってきたことをまとめることができ、防災意識に対する問題提起から、具体的な解決案まで論述することができる。</p> <p>このプロジェクトは継続して行われているプロジェクトである、前回のプロジェクトを通じて、地域の人とコミュニケーションを取ることができ、防災の面だけではなく、大学生が地域の問題に深く関わることができる。</p>
--	--

②サービス・ラーニングにおける活動の目標と目標達成に関する自己評価

AとBが示した、サービス・ラーニングにおける活動の目標と目標達成に関する自己評価は表5の通りである。

表5より、学生はサービス・ラーニングを通じて、それぞれが立てた目標をおおむね達成していることがわかる。

表5 サービス・ラーニングの活動における目標

参加学生	目標	自己評価
A	<p>(1) 教育や地域の方との対話を通して、コミュニケーション能力を向上させる。</p> <p>(2) 地域の課題に触れることで、課題の発見力・解決力等考える力を向上させる。</p> <p>(3) 活動を通して、自身の進路について深く考え、行動に移す。</p>	<p>(1)の目標について</p> <p>大きく達成出来た。相浦地域の方々や教職員の方々、様々な場面でお話をする機会があり、特に、地域の方々との数少ない交流の場でもあったため、積極的にコミュニケーションをとることができた。</p> <p>(2)の目標について</p> <p>概ね達成出来た。今回の主な活動場所は大学と大学周辺地域であった。私は地域の外に居住しているため、地域の特色や課題について、外の間人としての視点から、地元等と比較しながら考え、発見することができた。解決策に関しては、防災に関する知識が薄かったこともあり、多くの意見は出すことができなかった。</p> <p>(3)の目標について</p> <p>未達成となった。個人としての防災意識の高まりや、コミュニケーション能力の向上、課題意識を持って考えることは達成できたものの、防災関連の活動から</p>

		得たものや経験を、自身の進路と上手く結びつけることができなかった。
B	<p>(1) 学生の防災意識の現状を知り、向上案を考える。</p> <p>(2) 防災意識だけではない相浦地域の課題を明らかにする。</p> <p>(3) 他学部の先生方と交流を持ち多角的な視点を持つ。</p>	<p>(1)の目標について</p> <p>防災キャンプや消防訓練に参加することで、学生たちの防災に対する意識や知識の現状を理解し、向上案を考えることができた。防災キャンプでは、DIG（災害図上訓練）や救急救命講習、防災セミナーを通じて、地域の大学周辺地域のハザードマップを作成し、災害時の避難ルートや避難所の場所を議論した。また、消防訓練では、火災時の適切な対応や救急処置の方法を実践しながら学び、防災意識の向上に貢献した。</p> <p>(2)の目標について</p> <p>防災セミナーや地域創造学部との交流を通じて、地域の課題について深く理解し、解決策を模索することができた。防災セミナーでは、避難所運営ゲームを行い、地域の防災組織の運営について議論した。また、相浦地区の方たちとの交流を通じて、地域の課題やニーズについて学び、地域社会に貢献するためのアイデアを共有した。</p> <p>(3)の目標について</p> <p>消防訓練の周知活動やパンフレット作成を通じて、他学部の先生方との交流を深め、多様な視点やアプローチを学ぶことができた。消防訓練の周知活動では、地域創造学部や経営学部に対してチラシを配布し、消防訓練への参加を促進した。また、パンフレット作成では、国際経営学科の留学生と協力して、参加者向けのパンフレットを作成し、多角的な視点からパンフレットを作成することができた。</p> <p>当初、目標には掲げていなかったが、今回の活動を通じて学生同士の交流や</p>

		<p>チームワークを積極的に行うことができた。特に災害対策チームは今年度から発足したチームであり、先生方が主体な部分も多くあったが、学生が各々自身に必要なと感じたことに意見をし、防災キャンプ、消防訓練ともに学生が主体的に動くことができ、チームの結束が強まったと思う。</p>
--	--	---

③サービス・ラーニングの成果

AとBが示した、サービス・ラーニングの成果については表6の通りである。表6内に示されているように、大学生の防災意識の向上を目指した活動としては、具体的には消防訓練の周知活動と、防災パンフレット（火災編、参考資料2）作成だった。周知活動においては、消防訓練について各ゼミでの口頭による説明を行い、参加を募った。また、パンフレット作成においては学生による学生のためのパンフレットという学生の視点を重視した。

表6より、学生は、サービス・ラーニングがもたらす社会人基礎力を身につけたほか、人生100年時代の社会人基礎力⁶における「自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら、自己実現や社会貢献に向けて行動するための目的、継続して学ぶことの重要性、そして多様な体験や経験、能力を組み合わせる統合する力」の重要性に気づき、習得していることが推察される。

表6 サービス・ラーニングの活動における目標

参加学生	目標
A	<p>サービス・ラーニングの活動に取り組んだことで、今まで以上に多くの人と積極的に関わりを持つことができた。私は、通学に毎日往復3時間程かかるため、講義以外で大学にいる時間が基本的になかったが、サービス・ラーニングの活動で、より長く大学に滞在し、先生や仲間と多くの意見を交わしたことは私にとってとても貴重な時間だった。</p> <p>また、サービス・ラーニングを通して、相浦地域の方々と一緒に活動することは、地域の特性について触れながら、リーダーシップ、コミュニケーション、問題解決能力などの実践的なスキルを磨くことができた。防災キャンプなどのイベントの参加からは、チームワークや協力の重要性も学ぶことができた。</p> <p>サービス・ラーニングと並行して、所属、活動していた災害対策チームでの活動はとても有意義な時間であった。特に、サービス・ラーニングで作成した防災パンフレットに関しては、災害対策チームのメンバーからの意見を多く採り入れ、何とか短い期間内に完成まで持っていくことができた。</p> <p>パンフレット作成に関しては、はじめ、情報が分かりにくい箇所があったり、</p>

⁶ <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

	<p>学生がインターネットを使って調べた情報をそのまま載せていたため、現実的でない箇所や、納得のいくものとするには足りない部分が多くあった。様々な実務経験のある先生方からは実践的な知識を、学生支援課の職員の方からは、見やすいパンフレットの作り方について教えていただいた。パンフレットは、火災編ということで完全版ではないものの、今後の災害対策チームでの活動や次年度のサービス・ラーニングの活動などに活かせるような成果物である考える。</p> <p>防災訓練では、消防署職員の方や参加者の方々からパンフレットについての意見が寄せられた。利用者のニーズに応えるべくこれからも改良を施していきたい。また、サービス・ラーニングの活動を通して、地域ごとに見合った防災のあり方について考える良い機会となった。今回は、相浦地域をフィールドとして、防災パンフレットや避難所の確認など様々な活動を行ったが、地元や将来的に居住する地域でも防災の意識を持って行動することが大切だと知ることができた。</p> <p>サービス・ラーニングを通して、個人の防災意識がとても高まった。</p>
B	<p>私は今回の実習で「サービス・ラーニング」と「防災対策チーム」に所属した。長崎県立大学や、相浦地区では、防災訓練などの防災に対するイベントが少なく、学生や相浦地区の方が防災を身近に感じることができない環境だった。</p> <p>9月27日に本学で実施されたキャンプに参加し、相浦地区の方々と一緒にDIG（災害図上訓練）、救急救命講習、防災セミナーを受講した。DIGでは、相浦の大学周辺地域の白地図とハザードマップを用いて、災害時の避難経路や安全地域をグループワークで話し合った。救急救命講習では、AEDの使い方や三角巾を用いた骨折や出血時の対処法について、実際に体験しながら学んだ。防災セミナーでは、避難所運営ゲームを通じて、災害時に避難所の経営の難しさを実感することができた。災害時に実際に避難所で起こった話を聞き、優先事項やリーダーシップに関する議論を行った。</p> <p>12月17日に行われた「消防訓練」では、ただイベントに参加するだけでなく、相浦地区の方、学生の防災意識を向上させるために、私たち学生の視点から行えることを考え提案した。</p> <p>今回私たちは、大学生の防災意識向上のために、消防訓練の周知活動とパンフレットの作成・配布の2点を行った。</p> <p>消防訓練の周知活動では、既に学内メールでの周知が行われていたが、参加申込みが未だに少数であることから、Aさんと二人で地域創造学部と経営学部に対してチラシを持って周り、積極的に参加を呼びかけた。</p> <p>また、パンフレットの作成・配布については、Cさんと協力して、消防訓練に参加する者や地域住民向けのパンフレットを作成した。このパンフレットは、参加者や地域住民に配布され、消防訓練に対する理解を深めるとともに、災害時の行動指針や避難所の案内など、役立つ情報を提供した。</p> <p>「消防訓練」では避難訓練と消火訓練を行った。避難訓練では大学で火災が起こったと仮定し、訓練を行った。毎日通っている大学でも避難経路を学生が把握</p>

	<p>していないことがわかり、実際に火災が起きた場合どのような行動が必要かの再確認と、消火器や避難経路などを平常時に周知する必要性を強く感じた。消火訓練では相浦地区の方とグループを作り、学生と地域の方が協力しながら訓練を行うことができた。</p> <p>これらの活動を通じて、地域との協働による防災意識の向上や地域社会への貢献が実現しました。今後も引き続き、地域との連携を強化し、より安全な社会の実現に向けて積極的に取り組んでいく。</p>
--	--

4. 留学先の安全を確保するための活動（担当：高）

2023年8月末から9月中旬までの3週間、佐世保校とシーボルト校の学生18名を連れて西安外国語大学へ留学した。留学前、留学中、そして留学後に、長崎県民と長崎を訪れる人々の心と命を守るためのサービス・ラーニングを意識し、以下の活動を行った。

(1) 安全に関する事前講座

昨年8月、福島県の汚染水問題により日中関係が悪化していた。中国の状況に関する限られた情報と学生たちの語学に対する不安、恐怖感を軽減するために、ワンポイント中国語レッスンを2回実施した。質問、依頼、願望、文化・習慣に関する基本的な会話や、中国人大学生との交流に役立つ会話フレーズを学び、コミュニケーションへの自信を高めた。

さらに、「長崎県民と長崎を訪れる人々の心と命を守るためのサービス・ラーニング」チームメンバーの中国人留学生から「中国人留学生の視点から見た留学先の安全確保に関する注意事項とアドバイス」の講習を受け、文化と習慣の尊重、安全情報の確認、健康への注意、通信手段の確保、緊急連絡先の確認、友人や地元の人との関係構築などについて学んだ。

国際情勢や日中関係を考慮し、学生たちの安全を確保するための準備を行った。また、国際交流センターや学生支援教務グループによる安全確保説明会にも参加し、「海外渡航のためのガイドブック」などを入手した。アドバイスとして、不要な外出の自粛、大声での日本語使用回避、一人での外出自粛、大学内連絡先の確認、政治的話題の避けることなどが含まれていた。

(2) 留学中と留学後の体験と学び

現地に着いてから留学後は、政治や国境を超えた民間レベルでのフレンドリーな関係を目の当たりにし、心と命を守る方法について観察し、考え、発信した。

①交通安全から命を守る

実際に現地で生活する中で、学生たちは車が多いのに信号機が少ないことに気づいた。信号機がない交差点で道を渡ることが多く、これが交通事故の潜在的な原因となっている。また、デリバリーを行う配達員はしばしばスマートフォンを見ながら配送先を探しており、これが交通事故の高いリスクを生み出している。日本人はこれらの状況に不慣れであり、交通事故に巻き込まれる恐れがあった。従って、最大限の注意が必要だった。

②異文化環境での心の安定を保つ

現代社会において、心を守ることが命を守ることにつながるということを深く実感しました。サービス・ラーニングの最終報告会では、学生たちは民族性や異文化に関する深い洞察を通して、心と命を守る方法について発信した。例えば、一人の学生はルーマニア人との相部屋生活で衛生習慣の違いに直面

し、自己主張せず我慢を続けた結果、2回も高熱を出した。別の学生は、デリバリー配送者との意志の疎通が困難で、大きな問題に直面し、引率教師が介入して解決しましたが、その過程で恐怖を感じたこともあった。

この経験から、異文化の中で生活することの重要性を理解し、県民に伝えることで、彼らの心と命を守る手助けとなることを願っている。

③留学終了後の報告と発表

今回の留学に参加した学生は、さまざまな場で積極的に留学体験、感想、心と命を守るアドバイスなどについて報告と発表をした。

- 1) 令和5年10月24日に中国駐長崎総領事と会談した。
- 2) 令和5年10月27日に大学国際交流センターで開催された国際交流報告会で、2名の学生が報告した。
- 3) 令和5年11月22日と23日に、数名の学生が長崎県で開催された「日中青少年交流」研修プログラムに参加し、留学未経験者に留学の経験やアドバイスを伝えた。
- 4) 3名の学生が令和6年1月28日に長崎県中国語スピーチ大会に出場し、留学体験についてスピーチをしました。上級部で1位と2位、初級部で3位に輝きました。
- 5) 令和6年2月25日に、3名の学生が「2023年度学長裁量教育研究費：長崎県民と長崎を訪れる外国人の心と命を守るためのサービスラーニング報告会」で発表した。
- 6) 留学体験談を8部、感謝状を10部作成し、県立大学のホームページに掲載し、西安外国語大学にも送付した。これらは来年の留学生のための参考資料として、また環境整備にも貢献するものとする。

Ⅲまとめ

今年度は、研究期間3年目のうち、2年目にあたった。昨年度はコロナ感染症の拡大防止の余波から本研究で掲げた4つの課題の全ての実施が叶わなかったが、今年度はすべての内容を実施することができた。また、学生が自身の問題意識に基づいて、地域や大学に対するサービス・ラーニングの実践を達成することができた。

昨年度は各課題の進捗管理が十分ではなかったことや提案を実践するための仕組みづくりが検討課題として残されていたが、今年度は定期的にミーティングを開催し、学内の組織や学長PJとも協働することで、活動内容を多様な場面で確認することができたほか、提案を実践につなげ、成果物等も作成できたことは大きな進展であるとする。

次年度は本研究の最終年度となるため、サービス・ラーニングのプログラムを継続するための仕組みづくりに注力するとともに、より多くの学生の参加を募るための工夫についても検討したい。また、今年度は学生の報告書の内容からその成果を検討するとどまったが、学生の成長の評価方法についてもさらなる研究を進めていきたいとする。

なお、本活動については、オンラインで報告会を行った。脚注に記載したURLから視聴できるようになっている⁷。

⁷ <https://youtu.be/OMXIUPTcRUI>